HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	オープンアクセスリポジトリ連合（Confederation of Open Access Repositories : COAR）第3回年次集会，総会（スウェーデン）参加報告
Author(s)	城, 恭子; 土出, 郁子
Citation	大学図書館研究, 97, 56-64
Issue Date	2013
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/53739
Type	article
Note	掲載したPDFは、本誌とはページ付けが異なる。
File Information	147-1021-2-PB.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

オープンアクセスリポジトリ連合（Confederation of Open Access Repositories : COAR）第3回年次集会，総会（スウェーデン）参加報告

城　恭子，土出郁子

抄録：2012年5月，スウェーデンのウプサラ大学でオープンアクセスリポジトリ連合（COAR）の第3回年次集会および総会が開催された。COARは2009年10月に発足した，リポジトリとオープンアクセスの推進につとめる国際的な非営利組織である。本集会は2日間にわたり，「リポジトリをコンテンツで満たす」「リポジトリのネットワークとサービス」をテーマにした事例報告セッション，ワーキンググループ会議，参加組織限定の総会などのプログラムにより，各国，各地域の現状報告と，オープンアクセスやリポジトリの諸課題についての議論が行われた。本稿ではCOARの活動を含め，本年次集会の概要を報告する。

キーワード：オープンアクセスリポジトリ連合（COAR），デジタルリポジトリ連合（DRF），機関リポジトリ，オープンアクセス，国際連携

1. はじめに

2012年5月21日−22日にスウェーデンのウプサラで開催された，オープンアクセスリポジトリ連合（Confederation of Open Access Repositories：COAR）[1]の第3回年次集会および総会に出席した。

COARとは，2009年10月に発足した，ヨーロッパ・南米・アジア・北米に渡る25か国・90以上の組織から成る，国際的なオープンアクセスリポジトリ連合である。世界中のリポジトリをネットワークでつなぎ，研究成果の可視性を高めると同時に，リポジトリシステム間の連携を強化し，リポジトリに関わる問題意識の共有を促進することで，国際的なオープンアクセス活動の推進を図ることを目的として設立された。創設メンバーとして，日本からは国立情報学研究所（NII），デジタルリポジトリ連合（DRF）などが参加している。

今回の第3回COAR年次集会および総会は，スペイン・マドリッドにあるスペイン国立通信教育大学で行われた第1回総会，ハンガリーのデブレツェン大学で行われた第2回総会に続き，3度目の総会に当たる。

本稿では，2日間にわたって開催された年次集会および総会の議事内容について，概要を報告する。なお，「1. はじめに」から「3.3.1　WG1リポジトリをコンテンツで満たす（Repository Content）」までを城が，「3.3.2　WG3リポジトリとそのネットワークのための支援，研修（Repository and Repository Networks Support & Training）」から「5. 戦略会議」までは土出が執筆し，「6. 参加して」の執筆と全体の調整を両者で行った。

2. COAR年次集会について[2]

本年次集会は，COAR参加組織限定の総会と，事例報告，グループ討議，ポスターセッションといった総会以外のプログラムから成る。年次集会の性格はCOAR参加組織間の情報共有や課題解決の場であるとともに，現段階では新たな参加組織獲得の機会にも設定されているようである。よって集会参加者はCOAR参加組織に限らず，参加資格も特に問われない。参加者自身が興味を持つなら，ワーキンググループ（以下WG）の会議にも出席できる。実際にはCOAR非参加組織からの集会参加はあまり見られなかったように感じた。ただし，後述するように，総会開催時点でCOAR非参加のインドは，現地からのSkype中継による事例報告を行っている。

概要，プログラムは以下の通り。

2.1　集会概要

会議名：オープンアクセスリポジトリ連合（COAR）第3回年次集会
日　程：2012年5月21日-22日
開催場所：スウェーデン，ウプサラ大学（Uppsala University）
参加者：45名・19か国（アメリカ，アルゼンチン，イギリス，イタリア，ウルグアイ，オーストリア，オランダ，カナダ，スウェーデン，スペイン，中国，デンマーク，ドイツ，日本，ノルウェー，ハンガリー，ベルギー，ポルトガル，メキシコ）

日本からの参加者：武田英明教授（NII），
土出郁子（DRF/ 大阪大学），
城　恭子（DRF/ 北海道大学）

今回は，開催地ウプサラが誇る名門・ウプサラ大学と，スウェーデン王立図書館（Kungliga Biblioteket：KB）が会議のホスト役を務めた。ウプサラ大学図書館（Carolina Rediviva）の書庫内ホールを主会場として，高い書架や古い地球儀が並べられたアカデミックな香り高い雰囲気の中で，議事が執り行われた。

写真1　ウプサラ大学図書館

写真2　会場の様子

2.2　プログラム

5月21日（月）

（1）イントロダクション
（2）基調講演
（3）事例報告セッション1：リポジトリをコンテンツで満たす
（4）ポスター紹介
（5）ワーキンググループ会議
（6）総会（COAR参加メンバー限定）

5月22日（火）

（1）事例報告セッション2：リポジトリ・ネットワークとサービス
（2）グループ討議

3. 年次集会

3.1　イントロダクション・基調講演

COAR議長であるノーバート・ロッソー（Norbert Lossau）博士の挨拶に始まり，年次集会のイントロダクションとして，開催地であるスウェーデンから，スウェーデンにおけるオープンアクセスの概況について，およびスウェーデン国内の大学等の共同リポジトリコンソーシアムDiVA[3]について，二つの事例報告があった。

スウェーデン国内のオープンアクセス活動を牽引するプロジェクト「OpenAccess.se」[4]は，スウェーデン王立図書館が中心となって進められており，図書館員向けの会合や研究者向けのセミナーの開催，WEBサイトやブログの運営といった活動を通じて，オープンアクセスの啓蒙に努めている。このプロジェクトを受けて，スウェーデン国内では，スウェーデン研究評議会（The Swedish Research Council）をはじめとするいくつかの政府の財政支援団体によって，資金助成を受けた研究成果のオープンアクセス義務化が実現しているということであった。また，大学等の高等教育機関においても，所属研究者の研究成果のオープンアクセス義務化が進められていることが紹介された。

DiVAは2000年にウプサラの研究機関Electronic Publishing Centre（EPC）で開発されたシステムを基にしており，現在ではスウェーデン国内の大学・研究機関等の30機関が参加する，大規模な共同リポジトリシステムである。スウェーデン学術出版物統合ポータルサイト：SwePubや，ヨーロッパで広く導入されている研究者総覧（Current Research Information System：CRIS）など，その他の学術情報システムとDiVAとの連携が進められており，リポジトリに登録された研究成果のさらなる活用を目指した取り組みについて，報告があった。また，DiVAシステムの技術を用いた，貴重書の電子化プロジェクトについても紹介された。ウプサラ大学図書館が所蔵する，「Silver Bible」（ユネスコの世界記憶遺産に認定）をはじめとした，貴重書コレクションの電子化公開が進められているということであった。

次に，基調講演として，中国科学院国家科学図書館の張暁林（Zhang Xiaolin）博士から，中国における機関リポジトリの発展の歴史，および今後の展

望が紹介された。中国では，直近3年間で中国科学院の関連研究機関において76の機関リポジトリが公開され，現時点で22の機関リポジトリが公開準備中とのことであった。急増する機関リポジトリの担当者をサポートするため，中国科学院では，実務担当者向けの各種ガイドラインおよびサポートシステムの整備が進められていることが紹介された。中国におけるオープンアクセス活動は，中国科学院の強力なリーダーシップによって牽引されていることを，強く印象付ける講演であった。

3.2 事例報告

3.2.1 セッション1：リポジトリをコンテンツで満たす

オープンアクセスとライセンシングの両者を効果的に推進している優良事例として，ドイツとアルゼンチンの事例報告が行われた。

ドイツのゲッチンゲン大学図書館からは，出版社・学協会と国家レベルで交渉を行い，機関リポジトリに対する利用許諾の範囲を協議する，ライセンシングの取組が報告された。既に複数のジャーナルについて，版元との合意が成立しており，交渉におけるノウハウを蓄積したガイドラインをウェブ上で公開している[5]ということであった。

また，同じくドイツのマックス・プランク協会からは，図書館主導ではなく，研究者主導によるラインセンシングとオープンアクセスの取組が紹介された。

アルゼンチンからは，国家単位・ラテンアメリカ地域単位のオープンアクセス推進の取組が紹介された。アルゼンチンでは，2001年に国内で起こった経済危機を契機として，雑誌購読における国家ライセンスが実現したことが，結果として国家レベルでのオープンアクセス推進につながったということであった。ラテンアメリカでは，現在アルゼンチンをはじめとする8つの国に，COAR参加メンバー館が広がっている。その一方で，ラテンアメリカの研究・教育用ネットワークRedCLARA主導で，ラテンアメリカのオープンアクセスと機関リポジトリに関する連携ネットワークLA REFERENCIA[6]が組織されている。LA REFERENCIAには，現在ラテンアメリカの9つの国が参加しており，複数のプロジェクトがそれぞれ個別にCOARにも加盟している[7]ということである。ラテンアメリカにおけるオープンアクセス運動の隆盛が，強く感じられる報告であった。

3.2.2 セッション2：リポジトリ・ネットワークとサービス

リポジトリ・ネットワークをキーワードとして，4つの事例報告が行われた。イントロダクションとして，COAR WG2の主査エロイ・ロドリゲス（Eloy Rodrigues）博士から，WG2により策定中の段階にある，リポジトリ同士の相互運用性を高めるためのロードマップの概要，および2013年までの発表スケジュールが紹介された。ロードマップの第1弾として，相互運用性を実現するためのリポジトリに関するサービスの概観と，現在のリポジトリシステムのデータ基準等をまとめた最新リポートが，近日中に発表される予定ということであった[8]。

続いて，インドからの事例報告がSkype中継で行われた。学術コミュニケーションの発展に寄与するためには，個々のリポジトリ同士のネットワークが不可欠であること，地域や国を超えたつながりの重要性が，改めて指摘された。また，2012年7月にインドで開催される国際会議（International Conference on Trends in Knowledge and Information Dynamics：ICTK）において，COARのワークショップ出展が予定されていることが紹介された。インド国内におけるリポジトリの普及は，まだ緒に就いたばかりということであったが，リポジトリ発展の機運の高まりが感じられる報告であった。

日本からは，NIIの武田英明教授が三つのネットワーク（研究者，システム，リポジトリ担当者）という視点から，日本の状況について報告を行った。質疑応答の時間では，報告の中で紹介された「機関リポジトリアウトプット評価システム（Repository Output Assessment Tool：ROAT）」や「学協会著作権ポリシーデータベース（Society Copyright Policies in Japan：SCPJ）」に対して多くの質問が寄せられ，日本のリポジトリ事情に関する世界の関心の高さが窺われた。

最後に，OpenAIREplusプロジェクトの紹介が行われた。OpenAIREplusとは，EUが助成した研究成果をオープンアクセスで提供するリポジトリを連携させる“OpenAIRE”（Open Access Infrastructure for Research in Europe）の後継プロジェクトで，ヨーロッパにおける調査研究のためのデジタルリポジトリ基盤のビジョンを示すことを目的に行われたDRIVER（Digital Repository Infrastructure Vision for European Research）プロジェクトが元になっている。OpenAIREplusは，EUが助成したプロジェクトだけでなく，EU加盟国の国家単位のプロジェクトの研究成果物にまで収録範囲を拡げたものである，ということであった。

写真3　武田教授の発表

写真4　インドからのSkype中継

3.3　WG会議

COARには3つのWGがあり，各WGの会議が並行して行われた。WG1には城がゲストとして参加し，3には土出がWG3副主査として出席したため，本節では1と3の会議内容について報告し，2は割愛する。

3.3.1　WG1リポジトリをコンテンツで満たす（Repository Content）

WG1の会議では，2010-2011年の活動計画を受けて作成された，「リポジトリコンテンツ増進のための持続可能な優良事例」予備レポート[9]が配布され，これに基づき議論を行った。なお，レポートでは，研究者に対する啓蒙活動の一事例として，日本の活動を紹介したパンフレットについても取り上げられている。リポジトリコンテンツを効率的に収集するための方策について，各国参加者からの活発な意見交換がなされ，特に，組織が構成員に対して研究成果のリポジトリ登録を義務化する制度構築の取組について，各国の事例を交えて議論が交わされた。2012年の活動としては，今後も継続して国際的に優良事例を集め，情報共有を図っていくことが確認された。

3.3.2　WG3リポジトリとそのネットワークのための支援，研修（Repository and Repository Networks Support & Training）

WG3の会議では，昨年の活動報告と2012年度の活動計画案に基づく議論を行った。

昨年の活動としては，Helpdesksの連絡先リスト作成，リポジトリ担当者のための有用なリソース集作成，各国・地域で用いられている教材の収集などが挙げられる[10]。今年は昨年の活動に引き続き，オンラインワークショップの開催，教材の更なる収集と翻訳，COAR参加組織メンバーへのサポートなどを行うこととなった。

2012年2月末から3月初頭にかけて実施されたCOAR参加組織へのアンケート調査のうち，本WGの参考となる回答結果も紹介された。「興味のある情報」について，62%が「メンバーとの情報交換・交流」，52%が「オープンアクセスやリポジトリに関する工夫・具体的な方法」と回答している。COARは国際的な組織として，国や地域をまたがる情報交流・課題解決の場になることを期待されていると感じた。

写真5　WG3の会議の様子

3.4　グループ討議（Interactive workshop）[11]

今年は年次集会の中でいくつかの新しい試みが成されたが，このグループ討議もそのひとつであった。オープンアクセスとリポジトリに関わる5つのテーマについて各1名が進行役をつとめ，その他の参加者は5つのグループに分かれてテーマごとに10分ずつディスカッションを行う。テーマごとに部屋が分かれており，進行役は各部屋に固定，グループは

10 分経つと次のテーマの部屋に移動するという方式で行われた。全てのグループが全てのテーマの議論を終えた後に，各テーマの進行役が議論の内容などをとりまとめて紹介した。

テーマは，サービス，技術（リポジトリ同士の連携，データリンクなど），リポジトリ担当者の育成など幅広いものであった。そのうちのひとつ「OA policies, licences and advocacy」は，学術商業雑誌論文のセルフアーカイブが論点であった。学術商業雑誌の購読契約の中にセルフアーカイブの権利を含めたものとする取り組み[12]，研究助成団体や機関による研究成果の公開義務化などが話題になった。特に研究者総覧（Current Research Information Systems: CRIS）との連携，研究成果の公開による研究機関の可視化，もうひとつの IR（Institutional Research）といったテーマは大きな関心をもたれる話題となっていた。更には，オープンアクセスの実践が研究者のキャリア・評価とは直接に繋がらず，所属機関における研究業績評価がインパクトファクター偏重の傾向にあることはヨーロッパでも同様のようである。

また「Training for repository managers」では，著作権に対する理解と解決方法など，実際のコンテンツ登録時における主に技術的な課題が各国でほぼ共通となっていることがわかった。共通の課題に対する知識・技術などをどのようにして共有するかという点で，英 RSP（Repositories Support Project）のウェブサイト[13]が優れているとの意見もあった。

この 1 時間強のワークショップ方式は，深い議論はできないが，参加者全員が複数のテーマを意識し考えるには有効で興味深い手法である。

3.5 ポスターセッション

COAR の年次集会では初めて開催されるポスターセッションに，COAR 参加の 10 プロジェクトが出展した[14]。ポスターは会期中を通じて会場後方に展示され，休憩時間等にポスターの前で様々な質問や議論が交わされていた。また，初日の午後には発表者がポスターの 2 分間紹介を行った。DRF からはプロジェクト内容を紹介するポスター出展を行い，研修やワークショップ，機関リポジトリアウトプット評価システム（ROAT）の仕組みなどについて質問を受けた。

ポスターを出展した 10 プロジェクトには，英国 JISC のリポジトリ助成事業である「UK RepositoryNet+」[15]や前出の「LA REFERENCIA」などもあった。リポジトリとオープンアクセスに関わる多くのプロジェクトやコミュニティ形成が，長期的な視野に基づく公的助成によって行われている印象を受けた。

写真 6　ポスタープレゼンテーション

写真 7　展示ポスターの前

4. 総会

総会は初日の夕方に行われた。年次集会のプログラムの中で唯一，COAR 参加組織に限定される部分である。出席者は 41 名，所属内訳は，投票権のある参加組織が 23，投票権のないパートナー組織が 5 であった。投票数が定足数を満たしているため，総会は成立することとなった[16]。

総会の議事次第は以下の通り。

- 議長による開会挨拶（Welcome by the Chairperson of the Executive Board）
- 年次報告 2011/2012 − 理事会，事務局（Annual Report 2011/12 − Executive Board, Director & Office）
- 活動報告 − WG（Activity Report − Working Groups）
- 活動報告 − コンサルタント（Activity Report − Consultant）

・ 2012/13年概観（Outlook 2012/13）
・ 新理事会・監査役員選挙（Election of the new Executive Board and Auditor）
・ その他，閉会（Miscellaneous and Closing of Assembly）

4.1 議長による開会挨拶

最初に，ロッソー議長から各国各地域からの出席に対する歓迎コメント，新規参加組織の紹介，議事確認，などがあった。新規参加組織からは，本集会にも出席していたオーストリアのウィーン大学が紹介された。

4.2 年次活動報告

総会資料として配布されたAnnual Report 2011/12に基づき，理事会が昨年度活動報告を行った。組織，参加機関，財政，出展（会議出席，ポスター，口頭発表，講演）実績などの報告に加え，2011/12の戦略計画の振り返り，これまでにCOARが出した公式コメントや締結した覚書の紹介，ラテンアメリカへの関係，支援を強化していることなどが報告された。財政については，前年度は赤字となっているが（支出の原因はウェブサイトの改訂や人件費，収入面の問題は会費の徴収など）これまでのトータルでは黒字であること，対策としては，戦略に基づき支出の優先度をより一層厳密に検討していくことなどが報告された。

理事会報告の後，各WG会議での報告をさらに整理する形で各WG主査が昨年度活動報告を行った。

4.3 2012/13年概観

理事会から次年度の計画等について簡単に報告があった。内容は今後のCOARの方針，組織体制，参加機関メンバーのCOARの活動への関与を進めること，COARが出展・会議を予定している主なイベントの開催日程などであった。ヨーロッパが中心ではあるが，アジア，ラテンアメリカなども対象となっている。これらは最終的に戦略計画として確定，公開される（5章に述べる）。

4.4 新理事会・監査役員選挙

2012年10月からの新理事会役員選挙が行われた。選挙の結果，議長にはゲッチンゲン大学のロッソー博士が再任，小樽商科大学の杉田氏が務めている副議長の後任には，ウルグアイ/RedCLARAのカルメン-グロリア・ラベ（Carmen-Gloria Labbé）氏が選出された。また，監査役には，新たに常任理事に就任したスペイン国立通信教育大学（UNED）のアリシア・ロペス・メディナ（Alicia López Medina）氏の後任として，デブレツェン大学（ハンガリー）図書館のマルタ・ヴィラゴス（Márta Virágos）氏が選出された。

また，その場で会計監査にウィーン大学（オーストリア）図書館のパオロ・ブドローニ（Paolo Budroni）氏が推薦され，出席者による拍手をもって承認された。

ヴィラゴス氏は即日，その他は10月から就任となる。

5. 戦略会議

COAR年次集会のプログラムは2日目（5月22日）の昼で終了したが，午後に，理事会および各WG主査，各地域の代表者による戦略会議が開催された。副議長杉田氏の代理としてNIIより武田教授が，DRFより土出が出席した。その内容を簡単に報告する。

出席者は14名程度，事前に配布された「COAR戦略計画（Strategic Plan）2012-2014（案）」をもとに議論が行われた。構想段階であった「戦略計画（案）」の定義や目標の語句を整理しつつ，方針と活動計画を検討していくことが本会議の主な目的である。

活動については，リポジトリの国際的な動向をウォッチし，署名入りで紹介，解説するCOAR Repository Observatoryの設置や，年次集会のグループ討議（Interactive Workshop）で出席者から出た意見を具体的な活動に落とし込んで計画に盛り込むことなどが検討された。また，現在COARへの参加を検討している組織や今後連携を深めたい地域として，ギリシア，オーストラリア，オランダ（Knowledge Exchange），イギリス（EDINA）などが挙げられた。

更に，理事会だけでなく各地域を代表する運営委員会としての役割を担う組織の設置が提案された。最終的に「戦略委員会（Strategic Committee）」の設置が決定され，本戦略会議の出席者を中心に組織されることとなった。戦略委員会は具体的には，計画の策定や今後の出展，自地域の他国との連携等を行っていく。

なお，本会議では戦略計画（案）の大きな方向性の整理が中心となり，活動計画の詳細な検討と文言の確定は会議後のメールによる意見交換に持ち越されることとなった[17]。

6. 参加して

COAR は DRIVER プロジェクトから発足した非営利組織[18] で，DRIVER 議長（当時）のロッソー博士が COAR 議長の座に就いている。OpenAIRE は DRIVER の後継プロジェクトとしてヨーロッパの公的助成研究成果とリポジトリとの連携を扱っているが（3.2.2 参照），COAR は DRIVER から，オープンアクセス実現のための大きな手段であるリポジトリ自体の発展と，リポジトリを含む世界的な知的基盤（infrastructure）の構築という課題を引き継ぎ，舞台をヨーロッパ中心から世界に展開させようとしている。これらは時限的プロジェクトで取り組むよりも，今後は正に基盤として長期的に整備されていくべきことである。その過程で，世界各国で展開する様々なプロジェクトや各国の状況が共有される必要がある。

オープンアクセスやリポジトリに関するプロジェクト，定期的な国際会議などがすでに数多く存在する[19] 中で，COAR は具体的に何を担っていくかを明らかにする必要があった。土出は，2011 年 3 月に開催された第 2 回総会にも参加の機会を得たが，この頃には COAR が単独で新規のサービスを立ち上げようとしている印象を受けた。発足より 2 年半が経ち，現在は，世界の現状の共有と，現在機関リポジトリやオープンアクセスに取り組んでいる地域への支援に重点を置いていくようである。COAR の課題取組を具体的に実現する WG では，1（Repository Content）と 2（Repository Interoperability）が前者に，3（Repository and Repository Networks Support & Training）が後者にあたる。国際的なコミュニティ・ネットワークを基盤として，オープンアクセスを巡るファクターをトータルでサポートしていくことを目指すのが，COAR という組織である。

世界各国からの様々なオープンアクセスに対する取り組みの報告を受けて，強く印象に残ったのは，ラテンアメリカやインド，中国など，オープンアクセスやリポジトリの取組が普及しつつある国々の，リポジトリ担当者の元気の良さ・モチベーションの高さである。それぞれの事情は違えど，自国内および地域のリポジトリ・ネットワークを強化し，オープンアクセスを推進していきたいという気概には，共通するものが感じられた。特にラテンアメリカのコミュニティ「LA REFERENCIA」を構成する各国担当者たちからは，各国だけでなくラテンアメリカ地域全体として，リポジトリを通じてラテンアメリカ発の学術情報のプレゼンスを高めていこうという目的のもと，結束してオープンアクセス活動の推進に取り組んでいる様子が窺われた。

日本においても，DRF に代表されるリポジトリ担当者のコミュニティをベースとして，研修や国際会議，ワークショップなどの取組を通して，リポジトリは着実に発展してきている。今回の年次集会に参加し，各国の参加者との意見交換を通して，日本がこれまで積み上げてきたリポジトリの取り組みに対する世界の関心の高さを，改めて感じることができた。

また，オープンアクセスの潮流は既にリポジトリのみにとどまらず，雑誌購読契約や研究機関評価等とも密接に関連しつつある。本集会でもこれらの話題がしばしば取り上げられた。リポジトリコミュニティは，オープンアクセスの大きな文脈の中で関連する話題や取組とも同調して，その役割を果たしていく必要がある。

本集会への参加は，世界各国の状況や共通の課題を直接話し合い，認識することのできる良い機会であった。世界中のリポジトリに関わる人々が，国や地域を超えて情報を共有し，対等な立場で意見交換を行うことができる場は，たいへん貴重である。COAR のような活動の場を通じて，日本の取組を積極的に世界に向けて発信していくことが，求められているのではないだろうか。

今回，参加の機会を与えていただいた関係者の皆さまに感謝いたします。

注記および参考文献

1）COAR-Greater visibility and application of research through global networks of Open Access Repositories.（online）, http://www.coar-repositories.org/,（accessed 2013-01-31）.
2）COAR. Annual Meeting 2012.（online）, http://www.coar-repositories. org/community/events/archive/annual-meeting-2012/,（accessed 2013-05-03）
3）DiVA.（online）, http://www.diva-portal.org/,（accessed 2013-01-31）.
4）Kungliga biblioteket［National Library of Sweden］. OpenAccess.（online）, http://www.kb.se/openaccess/,（accessed 2013-01-31）.
5）Deutsche Forschungsgemeinschaft［ドイツ研究振興協会：DFG］. Open Access-Nationallizenzen［ナショナルサイトライセンス］.（online）, http://www.nationallizenzen. de/open-access,（accessed 2013-01-31）.
6）LA REFERENCIA.（online）, http://lareferencia.redclara.net/rfr/,（accessed 2013-01-31）.
7）COAR Newsletter No.4. Oct 2012 を参照。COAR _

Newsletter No 4 - Oct 2012.（online）, http://www.coar-repositories.org/files/COAR-_Newsletter-No-4-Oct-20124.pdf,（accessed 2013-01-31）.

8）本リポートは2012年10月26日に発表された。COAR Working Group 2: Repository Interoperability. The Current State of Open Access Repository Interoperability（2012）.（online）, http://www.coar-repositories.org/files/COAR-Current-State-of-Open-Access-Repository-Interoperability-26-10-2012.pdf,（accessed 2013-01-31）.

9）COAR Working Group 1 : Repository Content. Preliminary Report–Sustainable Best Practices for Populating Repositories.（online）, http://www.coar-repositories.org/activities/repository-content/preliminary-report-sustainable-best-practices-for-populating-repositories/,（accessed 2013-05-03）.

10）Helpdesks，リポジトリ担当者のための資源，教材およびWG3の活動計画については，ウェブサイトを参照のこと。COAR Working Group 3: Repository and Repository Networks Support & Training.（online）, http://www.coar-repositories.org/activities/support-and-training/,（accessed 2013-05-03）.

11）COAR. Interactive Workshop Annual Meeting 2012.（online）, http://www.coar-repositories.org/files/Interactive-Workshop-Annual-Meeting-2012.pdf,（accessed 2013-01-31）.

12）本集会の1ヵ月後，WG1を中心に「Open Access Agreements and Licenses Task Force」が立ち上がった。学術商業雑誌の購読契約をも含めた，持続的で有効なオープンアクセスの推進を課題とし，メンバーはリポジトリ関係者と雑誌購読ライセンス関係者から成る。COAR参加組織以外からも参加している模様。
COAR Open Access Agreements and Licenses Task Force.（online）, http://www.coar-repositories.org/activities/licenses-task-force/,（accessed 2013-05-03）.

13）RSPは英国の機関リポジトリ構築・運営支援のプロジェクト。2012年1月にデジタルリポジトリ連合（DRF）と会合を持ち，同年3月に協力関係の覚書を締結した。Repositories Support Project.（online）, http://www.rsp.ac.uk/,（accessed 2013-01-31）.

14）COAR Annual Meeting 2012 Presentations and Abstracts.（online）, http://www.coar-repositories.org/community/events/archive/annual-meeting-2012/presentations-and-abstracts/,（accessed 2013-05-03）.

15）UK RepsoitoryNet+は2011年より開始されたJISCの助成プロジェクトで，2012年2月から第2期となった。JISCのデータセンターであるEDINA（エジンバラ大学にあり）が運営しており，前出のRSPをはじめ，複数のJISC助成プログラムが関連している。
UK RepositoryNet+.（online）, http://www.repositorynet.ac.uk/blog/,（accessed 2013-01-31）.

16）COAR定款10条8によると，総会成立には総会参加者の票数が，開催時点のCOAR参加組織総票数の3分の1に達する必要がある。5月21日現在の総票数は43であり，定足数は15となる。定款は以下を参照。
COAR Articles of Association.（online）, http://www.coar-repositories.org/about/coar-ev/articles-of-association/,（accessed 2013-05-03）.

17）COAR2012-2015戦略および2012-2013活動計画はその後，メールでの意見交換を経て2012年9月10日に確定，公開された。
COAR Strategy 2012-2015.（online）, http://www.coar-repositories.org/files/COAR-Strategy-FINAL1.pdf,（accessed 2013-01-31）.

18）DRIVER COAR.（online）, http://www.driver-repository.eu/DRIVER-COAR.html,（accessed 2013-01-31）.

19）たとえば定期的な国際会議では，リポジトリシステムのコミュニティ会議である「Open Repositories」（2012年は第7回），ベルリン宣言の定期的なフォローである「Berlin x」（2012年で10回目を迎えた），アメリカSPARCが主催する「SPARC Digital Repositories Meeting」（2004年に第1回，2008年以降は隔年開催。2012年より「SPARC Open Access Meeting」と名称変更）等がある。
また，欧米を中心としたリポジトリやオープンアクセスを巡る状況，プロジェクトの国際レビューについては以下がある。内島秀樹．機関リポジトリを巡る国際的状況：欧米を中心に．大学図書館研究．2010，No.90，p.10-23.

＜2013.2.5　受理　じょう　きょうこ　北海道大学附属図書館　つちで　いくこ　大阪大学附属図書館専門職員＞

Kyoko JO, Ikuko TSUCHIDE

Report of the COAR（Confederation of Open Access Repositories）Third Annual Meeting 2012

Abstract：In May 2012 the third annual meeting of COAR（the Confederation of Open Access Repositories）was held at Uppsala University Library, Sweden. COAR is a young, fast growing association of repository initiatives launched in October 2009, uniting and representing 90 institutions worldwide（Europe, Latin America, Asia, and North America）. The meeting had two-day program including seven case reports from different countries and areas of the world, working group sessions and a General Assembly（only COAR members and partners were permitted）. This report introduces the highlights of the meeting and activities of COAR.

Keywords：Confederation of Open Access Repositories（COAR）/ Digital Repository Federation（DRF）/ institutional repositories / open access / international relations